

IPM実践指標(かんしょ)

管理項目		管理ポイント	点数	チェック欄		
				昨年の 実施状況	今年度の 実施目標	今年度の 実施状況
予防	病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備	健全苗, 種イモの確保	育苗には帯状粗皮症防除のためウイルスフリー苗を用いる。 種イモで育苗する場合には無病のものを選ぶ。	1点		
		健全苗の育成	苗床は夏期に石灰窒素を利用した太陽熱消毒を実施する。 微小害虫(アブラムシ類, タバココナジラミ, ハダニ類)の発生に注意し, 初期防除に努める。 育苗中の室温は30℃を超えないように通風換気する。	1点 1点 1点		
	栽培圃場周辺での雑草管理	栽培圃場周辺での雑草管理	ほ場周辺の雑草を除去し, 病害虫雑草のほ場内への侵入を防止する。	1点		
		土壌pHの矯正	土壌pHを測定し, pHが高い場合には石灰質資材の施用を中止し, 硫酸根肥料に切り替える。	1点		
	施肥	施肥	2~3年に一度は土壌診断を受け, 診断結果を参考にして適切な施肥を行い, 3要素(窒素、リン酸、カリ)の過剰施肥を避ける。	1点		
		挿苗	適正な栽植密度とする。	1点		
	貯蔵	貯蔵	貯蔵する場合は収穫イモをなるべく早く適切な方法でキュアリング処理する。	1点		
判断	防除要否, タイミングの判断	発生予察情報等の活用	病害虫防除所の発生予察情報等を参考にするなど, 病害虫の発生動向を注視し, 防除計画を作成する。	1点		
		気象情報の把握	週間天気予報等の気象情報を把握し, 防除の要否を判断する。また、適期防除を心がける。	1点		
		トラップの設置	フェロモントラップを設置し, 害虫の発生動向を把握することで防除の要否, 防除時期の判断をする(ハスモンヨトウ)。	2点		
		病害虫の観察	近隣の作物や畦畔の雑草での病害虫の発生状況を確認し, ほ場での発生を予測するなどの判断材料とする。	1点		
			病害虫の発生状況を観察し, 発生初期に薬剤散布を行うなど効果的な防除を行う。また発生が極めて少ない場合は捕殺や抜き取りを行う。	1点		
		土着天敵の確認	化学農薬を使用する場合は, その使用前で最低1回はクモ, 寄生蜂等の当該地域に通常生息している天敵類の発生状況を確認する。	2点		
防除	耕種的防除	雑草管理	畝立てまでに雑草が発生した場合は, 種子の結実前に耕起耕耘を行う。多年生雑草は地下茎まで抜き取り, 適切に処分する。	1点		
		収穫後残渣の処理	収穫後残渣は病害虫の発生源となるため, ほ場内やほ場の周辺に捨てずに早めに処分する。	1点		
	生物防除	生物農薬の利用	生物農薬, 天敵製剤を利用する。	1点		
	物理防除	防虫ネットの設置	育苗施設は防虫ネット等により, 害虫の侵入を抑制する。	1点		
		マルチング	土壌温度を抑制し立枯病の発生を少なくさせるため, 白黒ダブルマルチ等を利用する。	1点		
		農薬の使用全般	作物の生育に併せ, 十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1点		

IPM実践指標(かんしょ)

管理項目			管理ポイント	点数	チェック欄		
					昨年の 実施状況	今年度の 実施目標	今年度の 実施状況
防 除	化学的 防除	クロルピクリン剤使用時の 留意事項	クロルピクリン剤を処理する場合には、遅くとも3月上旬までに行い、最高気温が20℃以上の日には行わない。	1点			
			クロルピクリン剤を処理する場合には適正な土壌水分を確保する。	1点			
			被覆するポリフィルムは厚さ0.03mm以上または難透過性フィルムとする。	2点			
			使用後の空き缶は放置せず、ガス抜き後処分する。	1点			
	薬剤の選択	植付前に線虫、コガネムシ類、ケラを対象に粒剤等を処理する。	1点				
		土着天敵に影響の少ない選択性殺虫剤(IGR剤、BT剤等)を利用する。	1点				
		特定の薬剤、同系統の薬剤を繰り返し使用しない。	1点				
	飛散防止	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	1点				
そ の 他	作業日誌	病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1点				
	研修会等への参加	県や農業協同組合が開催するIPM研修会等に参加する。	1点				
				合計 点数			
				対象 IPM計			
				評価結果			